

令和4年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について

1 調査の目的

- (1) 国が全国的な子どもの体力の状況を把握・分析することにより、子どもの体力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会が自らの子どもの体力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、子どもの体力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各学校が各児童生徒の体力や運動習慣、生活習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

2 調査対象とする児童生徒

- (1) 小学校調査
小学校、義務教育学校前期課程及び特別支援学校小学部の5年生全員
- (2) 中学校調査
中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校及び特別支援学校中学部の2年生全員
※特別支援学校及び小中学校の特別支援学級に在籍している児童生徒の参加については、その障がいの状態等による。

3 調査内容

- (1) 児童生徒に対する調査
 - ア 実技に関する調査
〔8項目〕握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン（中学校は持久走との選択）、50m走、立ち幅とび、ソフトボール投げ（小学校のみ）、ハンドボール投げ（中学校のみ）
 - イ 質問紙調査（運動習慣、生活習慣等）
- (2) 学校に対する質問紙調査
・子どもの体力の向上に係る学校の取組等

4 調査実施期間

- ・実技調査実施期間：令和4年4月から7月

5 調査実施校数（国立・公立、私立）

28,406校（小学校18,652校、中学校9,754校）

6 大分県児童生徒の状況

- (1) 調査校数・児童生徒数（公立）
 - ① 小学校（247校、男子4,606名、女子4,405名）
 - ② 中学校（118校、男子4,395名、女子4,224名）

7 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果（概要）について

(1) 体力合計点による全国順位【資料1】

- ① 小学校5年男子 2位（九州1位）（R3：1位、九州1位）
- ② 小学校5年女子 3位（九州1位）（R3：2位、九州1位）
- ③ 中学校2年男子 5位（九州1位）（R3：2位、九州1位）
- ④ 中学校2年女子 7位（九州1位）（R3：5位、九州1位）

(2) 体力合計点の状況【資料2】

- ① すべての対象学年において全国平均を上回っている。
- ② 本県、全国ともにH30をピークに低下傾向である。

(3) 各調査項目の結果【資料3】【資料4】

- ① 中2女子の上体起こしを除き、すべての対象学年・種目において本県は全国平均を上回っている。
- ② 過去最高値は、小5男女の長座体前屈であった。

(4) 体力総合評価【資料5】

- ① 総合評価がC以上の児童生徒の割合は、すべての対象学年において全国平均を上回った。
（小5男子1位、小5女子3位、中2男子2位、中2女子5位）
- ② 本県、全国ともにH30をピークに低下傾向である。
- ③ 本県、全国ともにD・E層は、すべての対象学年において増加傾向である。

(5) 児童生徒質問紙による調査結果【資料6】【資料7】【資料8】

- ① 運動やスポーツへの愛好度は、「好き」「やや好き」と回答した割合が、ほとんどの対象学年において全国平均を上回っているものの、小5女子は全国平均を下回った。
- ② すべての対象学年において愛好度は前回（R3）と比較すると上がっている。
- ③ 愛好度について前回（R3）との男女差を比較すると、すべての対象学年で差が縮まっている。
- ④ 1週間当たりの運動実施時間は、すべての対象学年において全国平均を上回った。
小5男女、中2女子は前回（R3）と比較すると上がっている。
- ⑤ 1週間当たりの総運動時間60分未満の割合は、すべての対象学年において全国平均を下回り、中2女子は過去最低値であった。

8 分析

- ① 本県の体力は、全国と比較すると依然高い水準にあるものの、全国同様にH30をピークに低下している。体力合計点の評価の変化を見ると、A・Bの児童生徒の割合が減少し、D・Eの児童生徒が増加していることがわかる。
- ② 愛好度の上昇については、コロナ禍での授業改善に加え、運動が苦手な児童生徒に対しても楽しくできる体育の授業や体育的活動の工夫があったためと考えられる。
- ③ タブレットなどのICT活用の効果が全国に比べ高い傾向にある。これは、体育授業での積極的な活用や、授業で付けたい力、視点を明らかにして撮影し合うこと、振り返りを共有することなどICTを効果的に活用した「わかる」「できる」「楽しい」授業改善が進んでいるためだと考えられる。

9 総括

- ① 本県の体力が全国と比較して高い水準を維持し続けているのは、これまで小学校体育専科教員、中学校体育推進教員を中心に、各学校が組織的に体力向上に取り組んできた成果と捉えている。また、愛好度の上昇については、コロナ禍にあっても楽しく活動できる取組が県下に広がったことに加え、ICTを活用した体育授業の充実や運動の苦手な児童生徒に視点をあてた授業改善に取り組んできた結果と捉えている。
- ② 本県の体力は全国と比較して高い水準にある一方で、全国と同様に体力の低下傾向に歯止めがかかっていない現状がある。今後は、これまでの取組を検証し、更に継続・発展させていくことが重要である。具体的には、運動の苦手なD・E層の児童生徒に視点をあてた授業の工夫・改善や、運動の楽しさを味わい、運動の習慣化・日常化につながる「1校1実践」を通して、全体の底上げを図っていく。